

ソウル

―六〇〇年の歴史と江南への発展―

奥田 聡

●六〇〇年間栄えた朝鮮半島の都

ソウル―ほかの漢字圏諸国と同様に韓国においても地名は漢字二〜三字の佳字を選んで書き表されるのが通例であるが、「ソウル」はその例外で、ハングルで表記する。その語源は新羅語で都の意味を持つ「ソラボル」との説が有力で、現在でもソウルは普通名詞の「都」を意味する。

ソウルは、現在の韓国の首都であるが、その朝鮮半島の首都としての歴史は六〇〇年以上にもわたる。

李氏朝鮮の太祖・李成桂の即位後ほどない一三九四年一〇月、首都が開城（現在の北朝鮮・黄海北道）から当時南京あるいは漢陽府と呼ばれていた今のソウルの地に移され、漢城府と改称された。李成桂が遷都を決意したのは、旧王朝の影響が強く残っていた開城か

らの脱出を図って新王朝の威光を高めるためであり、南方が開けその他三方が山に囲まれるソウルの旧王宮付近の地形を風水地理的に好ましいとした国師（最高位の僧侶）無学の勧めにより都邑として選定されたという。

それ以後もソウルは李氏朝鮮、旧大韓帝国の首都であり続けた。この頃、「ソウル」は主として口語として用いられたらしく、文献上は漢江沿岸の都市の意である漢城を主とし、京府、京城、京都、京師などの表記も用いられた。

一九一〇年から四五五年まで続いた日本統治時代には朝鮮総督府が置かれ、植民地朝鮮の中心都市として機能した。この頃は京城の呼称が使われたが、日本の統治終了後の米軍政下、一九四六年八月に京城府がソウル市と改称され、ソウルの名がここに正式に登場したのであった。

●朝鮮人の手で始められたソウル改造計画

李氏朝鮮時代のソウルは今とは比較にならないほどコンパクトな都市であった。当時の市域は李成桂が外敵侵入の防止を目的として築いた全長一七キロのソウル城郭の内部（都城）と、城壁から約四キロの領域（城底十里）に限られていた。

開都期の人口は一〇万人程度だった。その後一六世紀末から一七世紀にかけての文祿・慶長の乱（壬申倭乱）、丙子胡乱（清の侵入、一六三六〜三七年）と相次いだ戦乱で荒廃し、その復興は一九世紀にまでずれ込んだという。李氏朝鮮末期の日清戦争の頃には人口が二〇万人程度に増えたが、これが狭い都城内にひしめき衛生状態の悪化を引き起こしたことが当時の外国人の旅行記録に残されている（宮本外務大丞、イザベラ・バー

ドなどによる記録）。

形状し難い惨状を呈していた府内の状況は、日清戦争後の一八九六年に漢城判尹（ソウル市長に相当）に就任した李采淵が断行した都市改造により大きく改善される。在米朝鮮公使館の通訳官であった李は、滞米時にワシントンの市政運営を学んだ経験を生かし、ソウルの主要路上を埋め尽くしていた不法構築物の撤去と道路拡幅、現在の市庁前広場から放射状に延びる幹線道路の新設、路面電車および鉄道の導入などの交通インフラ整備を推進したほか、パゴダ公園など公園整備、水道、電気などの生活インフラ建設など、首都にふさわしい街づくりを目指した各種事業を次々に立ち上げたのであった。効果は程なく現れ、府内の交通・居住環境は大きく改善され始めた。

●日本統治期の本格的な膨張

ソウルの都市近代化は朝鮮総督府に引き継がれ、農村からの人口流入や新たに支配層となった日本人の移住もあってソウルは本格的な膨張の時代を迎える。一九二五年には人口が三四万人となり、日本の植民地支配が終了した四五

図1 ソウル区分地図



(出所) 筆者作成。

には九〇万人と、急速な増加がみられた。
この間、ソウルの都市計画はいくつかの重要な改編が行われた。一九三六年には隣接の郡の一部地域が京城府に編入され、府域は従前の四倍となる一三四平方キロメートルに拡張した。江北（漢江以北）では高陽郡の一部が新たに編入されて府域は西側に延びたほか、この時初めて府域が漢江の南側（江南）に伸びた。この際には始興郡と金浦郡の一部が京城府に編入されており、府域は京釜本線に沿って永登浦方面に延びた。

江北の旧市街所在の日本人居住地には古くから「町」の付く地名がつけられていた。明洞聖堂が位置し、現在は衣料品店や飲食店が立ち並ぶ観光スポットの明洞は、当時明治町と呼ばれていた。旧市街地を見下ろす南山北麓には総督官邸があったが、この周囲に広がっていた日本人居住地には日出町、大和町、南山町などの地名がみられた。一方、朝鮮人居住地には引き続き〇〇洞という地名が使われ、市内には町・洞が混在する状況であった。一九三六年の市域拡張の際、編入地域に「町」の名称がつけられた。

また、一九四三年には人口増加にともなつて東京・大阪・京都などと同様の区制が導入され、現在の二五区制の基礎となる八区制が四四年までに完成した。この時成り立したのは、鍾路、中、西大門、東大門、竜山、麻浦、城東など江北の区であったが、江南にも永登浦区が置かれた。

●「ソウル」誕生と更なる拡大

解放後、日本風地名が一掃されるのは早かった。前述のように一九四六年八月に京城府が廃止されてソウル市となると、同年一〇月には「町」は「洞」に戻されて地名の韓国化が進んだ。日本風の固有名詞もこの際に大幅に改変され、現在の地名の原型がほぼ出来上がった。

日本の敗戦にともない、韓国に住んでいた日本人は引き揚げることになったが、それを上回る勢いで日本、旧満州、および三八度線以北からの帰国者がソウルに流入してきた。朝鮮戦争前の一九四九年には江北の高陽郡、江南の始興郡の一部が編入されて二六八平方キロメートルと市域が二倍に拡張、人口は一四四万人に増えた。朝鮮戦争による破壊で一時人口の増勢は足踏みをみせたが、一九五三年の休戦後の低米価政策による農村経済の荒廃により一九五〇年代後半から地方住民のソウル流入が激しくなった。学生革命が勃発した一九六〇年にはソウルの人口は二四五万人に達し、さらに増える勢いをみせていた。流入する人々は主としてソウル旧市街のある江北を目標とした。狭い市内には人があ

ふれ、市街地に隣接する山腹に多数のバラック住居（バンジャチプ）が建てられるようになった。これら新興集落は上下水道・電気などの生活インフラの整備が行き届かず、衛生状態の悪いスラムの様相を呈するものもあった。

●狭い市内からの脱出と江南の本格的開発

一九六〇年代のソウルは住宅問題が深刻さを増したほか、企業、学校、公共機関などの手狭さも問題となった。江北での市街拡大の努力は一九五〇年代後半から徐々に進められていたが、爆発的に増える土地需要に見合うものではないことは明白であった。爆発的な膨張をみせていた首都ソウルの土地問題の解決を図る切り札とされたのが現在の江南三区（江南、瑞草、松坡）⁽¹⁾ 一帯の開発であった。江南三区の本格的な開発に先立ち、一九六三年に広州郡、始興郡の一部を編入する市域の拡大が実施され、市域は二・二倍に広がった。この時、現在の江南三区に当たる地域は広州郡からソウル特別市城東区に編入された。一九七五年には城東区の漢江以南部分が江南区として分離され、七九年には

江南区から江東区を分離、八八年には江南区から瑞草区が、江東区から松坡区がそれぞれ分区して現在に至る。

ソウル市は一九六六年に「大ソウル都市基本計画」を策定、四大門内の旧市街、永登浦・汝矣島と並ぶソウル三核のひとつとして現在の江南三区一帯を指定した。これと前後して同年一月には漢江の南北を結ぶ新橋である第三漢江橋（現在の漢南大橋）が着工され、一九六七年一月には当時の朴正熙大統領が選挙公約として掲げた京釜高速道路の建設工事が始まり、これにもなって周辺の区画整理が加速した。

●住宅と学校建設のラッシュ

一九七一年に今の江南区論峴洞に公務員住宅が建てられたのを皮切りに、七三年には大韓住宅公社が現在の瑞草区盤浦洞に三七〇〇戸余りの大規模団地を造った。七六年には江南区狎鷗亭洞に現代アパートが完成、最終的には五九〇〇戸余の高級マンションからなる大団地が出現した。同年には盤浦・狎鷗亭・清潭・道谷洞が「アパート地区」に指定されたほか、総合運動場が造られた蚕室にも大

団地が出現した。

住宅建設の進行とともに、機関移転も始まった。その第一陣は学校であった。区画整理の過程で市は学校用地を広く確保、安価に払い下げた。一九七六年には名門の男子校として名高い京畿高が現在の江南区三成洞に、その翌年には同じく名門男子校の徽文高が現在の江南区大峙洞にそれぞれ江北の旧市内より移った。その後、淑明女高、ソウル高、中東高、同徳女高、京畿女高などが相次いで江南に移転してきた。

一九八四年に地下鉄二号線が全通、三号線が八五年に旧把撥・良才（今の瑞草区）間が開通することで旧市内との交通アクセスが向上すると、主要機関の江南移転が相次いだ。一九八六年と八八年にはそれぞれ韓国電力と韓国貿易協会が江南区三成洞に移転、八九年には法院総合庁舎が瑞草区瑞草洞に完成している。韓国貿易協会の入った貿易センタービルは地上五階の超高層ビルで、江南の新たなランドマークとなった。

江南はオフィスやショッピングの街としても発展していった。一九八〇年代末以降は、地下鉄二号線の三成・江南駅や三号線の狎鷗

亭駅などの周囲にはオフィスビルや商業施設の集積が始まった。一九八六年のアジア競技大会と八年のソウル五輪はいずれも松坡区蚕室の総合運動場（メインスタジアム）で行われ、江南は一躍世界にその名を知られるようになった。二〇一〇年現在のソウル市の人口は九六三万人で、その約半数にあたる四九三万人が漢江以南に住む。そのうち一五五万人が江南三区の住人となっている

●江南学区人気とアパート高騰

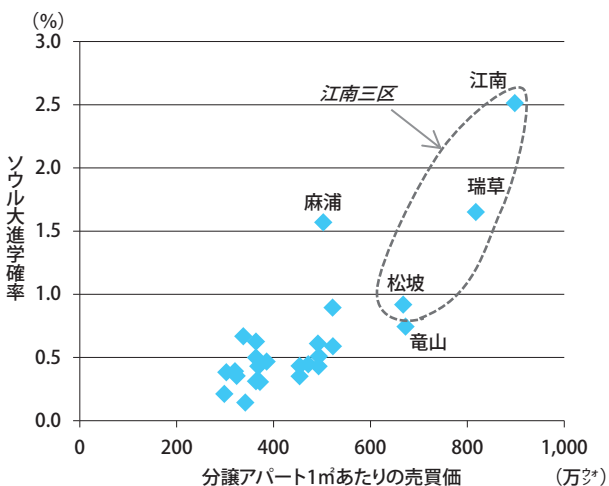
一九七四年、受験競争激化緩和の一環として、韓国政府は「高校平準化」政策に着手する。高校平準化とは、入学先の高校を決めるにあたって学区制を導入して有名校への志願集中を防ぎ、抽選を導入するなど、学力選抜の要素を大幅に減じ、高校間・学区間の格差を縮小しようとする制度である。ソウルにおける高校平準化は制度導入以後何回かの変遷を経ているが、各高校の独自選考の廃止と共通問題による「連合考査」を経て現在では入学試験は廃止され、中学校での成績が選考基準となっている。現在では全市が一一学群に分けられている。

しかし、ソウルでの高校平準化は完全ではなかった。ひとつには、平準化対象外の高校の台頭がある。一九八七年順次拡大した特殊目的高（特目高）がその代表例である。これは科学、産業需要（マイスター高）、芸術、体育、外国語、国際など特殊分野での能力育成を目指すものである。このほかに英才教育高、学校運営に幅広い裁量認められた自律高などもある。これら平準化対象外の高校出身者はソウル市内出身のソウル大新入生の過半を占めるまでになっている。

平準化対象となる一般高校についても、課題は残った。学群間の大学進学実績にはばらつきが残った。特目高などの台頭以前には学群間格差の問題は特に深刻であった。

江南では、第八学群（江南、瑞草区）のブランド価値が大きく上昇した。江南へ移転した有名校の多くは第八学群に属したからであった。同様に有名校の移転先となった松坡区でも学群人気が高まった。前記のような一九七〇年代以降一連の高校の江南移転は、学校の建設が急務となっていた江南に学校を誘致するとともに、江北の

図2 ソウル行政区別ソウル大進学確率とアパート価格 (平準化対象・一般高)



(注) ソウル大進学確率 = (各区一般高出身のソウル大2015年入学登録者) ÷ (各区一般高の2014年卒業生)。
 (出所) VERITASa (http://www.veritas-a.com/)、不動産114 (http://www.r114.com/) 所載のデータにより筆者作成。

有力学群から有名校を引き離し、学群間の平準化を狙ったものだった。しかし、学群間平準化の目論見は外れ、京畿高など有名校の移転先である江南の第八学群へ人気に移る結果となったのは何とも皮肉なことであった。

江南はアパート価格が高いことで韓国ではつとに有名である。盧武鉉政権末期、二〇〇五〜〇七年にかけての不動産ブームの際には、江南所在の専有面積一〇〇平方メートル程度の中型マンションが一〇億ウォン(約一億円)以上で取引される例が頻出した。江南の

アパート価格が高い理由として、上述の第八学群へのプレミアムがしばしば指摘される。このプレミアムとは、有体にいえば韓国の最高学府であるソウル大学への進学実績の高さである。江南、瑞草両区のアパートを買うことは第八学群出願資格を買うことであり、ソウル大へのより高い進学確率を手にする、もつといえれば子ども

の将来における生活安定のための投資なのだ。

果して、ソウル大学への進学確率の高さが不動産価格を押し上げるのか？ キムセジクは、二〇一

四年度のソウル行政区別のソウル大合格確率とアパート価格に強い正の相関があること(決定係数〇・七六)を示した(参考文献②)。アパート単価を親の経済力の代理変数とみなし、家計が豊かであればあるほど子弟をソウル大に送りやすい傾向

があると結論付けている。

●今も残る進学実績とアパート価格の相関関係

キムセジクの研究はソウル大合格確率という重要変数の定義が不明確で隔靴搔痒の感が強い。そこで筆者が最新のデータを駆使してソウル行政区別のソウル大進学確率とアパート単価の関係を調べた。

ソウル大進学確率は、二〇一五年度のソウル市内の高校出身者の入学登録データ(教育専門メディアのVERITASa提供、元データは与党議員から入手)を基礎とし、高校の所在地を行政区別実績算定の基準とした。卒業者数は二〇一四年実績を使った。各区のアパート価格は、三月六日現在の一平方メートルあたり平均単価(不動産専門ポータル不動産114の提供)を用いた。

ソウル市内の高校出身のソウル大入学者一三〇六人のうち、居住地を基準に入学先を振り分けられる一般高の出身者五九九人に関する分析結果を図2に示す。

散布図上の点は右肩上がりを呈し、アパート価格とソウル大進学実績との間に強い相関が認められる(相関係数〇・六九)。とく

に、江南三区については図の右上方に位置し、他の区とは際立った対照をみせる。アパート価格が高価であると同時に、ソウル大進学確率も高い。経済的に豊かな親が子どもをソウル大に送る傾向が強いというキムセジクの推論に首肯せざるを得ない。また、平準化対象の一般高を対象とした分析であり、世に上いわれる大学受験に備えた江南移住についても親たちの意図を感じざるを得ない。

(おくだ さとる/アジア経済研究所 国内客員研究員・亜細亜大学 アジア研究所教授)

《注》

(1) 江南とは、広義にはソウルの漢江以南全体を指すが、狭義には江南三区を指し、人々の意識においても狭義の江南を念頭にしていることが多い。

《参考文献》

- ① 川村湊『ソウル都市物語―歴史・文学・風景』(平凡社新書 〇三九) 平凡社、二〇〇〇年。
- ② キムセジク「経済成長と教育の公正競争」『経済論集』ソウル大学校経済研究所、五三巻一号、二〇一四年。